

# 異学年・異校種間交流授業による学びの可能性について

美術科 西 沢 明

## 1. テーマ設定にあたって

### (1) 生徒の実態

中学校美術科の教諭として20年余り授業を担当してきたが、この間、接してきた子どもたちには少なからぬ変化を感じている。それは漠然とした変化で、数量的な裏づけがあるわけではないのだが、例えば以下のような点である。

・発想，構想の活動における独自性の低下

美術における表現活動では、作品のイメージを考えたり、表現の方法を工夫したりする発想，構想の能力が求められる場面が多い。そうした場面で既存の作品や製品、あるいはキャラクターの模倣をめざす子どもは以前からいたが、その傾向が強くなっており、自分ならではの自由な発想や構想で考える子どもが少なくなっている。こうした様子は美術の活動だけでなく、例えば学校行事で描かれるポスターや身につけるグッズなどにも顕著に見られる。

・制作における知識，技能の低下

表現活動において、自分がめざすイメージ（それがどんなものであれ）を現実の作品として制作，実現するためには、道具や材料についての知識やそれを使う方法や技術についての知識が必要であり、さらにその知識を活用し、実際に行える技能が必要である。しかし年々、道具や材料についての知識が乏しく、以前なら行えた作業ができない、技能の力の低下を感じる子どもが増えている。そうした子どもたちの多くに、自分がめざすイメージと実際の作業や作品との間にギャップができてしまい、意欲が低下する様子が見られる。

### (2) 主題設定の理由

こうした子どもたちの状況はそのまま今後の課題でもある。すなわち自分ならではのより豊かな発想や構想の力を育成することと、その発想や構想を実現するための知識，技能の力を育成することである。さらにこうした課題を実現するためには、当然子どもたちの関心を高め、より意欲的に活動に取り組ませることが必要になってくる。こうした課題は、学習指導要領に示された美術科の目標そのものでもある。

本校では、過去2年間にわたって「共に学ぶ生徒の育成を目指して」を主題に学校研究を行ってきており、具体的な取り組みとして異学年交流，異校種間交流の可能性について実践，検証を行ってきている。美術科においても、授業の目標を自己表現と他者理解といったコミュニケーション力の育成の視点で捉えることであらたな実践の可能性が見出せるのではないかと考え、その試みの一つとして、教師と当該生徒の関係だけの活動から異学年の生徒を関わらせる活動を行うことで、その可能性を探っているところである。

### (3) これまでの研究経過

美術科における異学年間の交流活動については、以下のような活動を行ってきている。

3学年すべてで同一の教材を扱う「レタリング表札」では、前年度の同学年（上級生）が制作した作品を鑑賞することで、その知識，技術を自身の表現活動における発想や技術に活かそうとする姿が見られ、単独で活動を行うとき以上の成果が期待できることが明らかになった。さらに、実験的な試みとして2年生の一部の生徒に1年生の授業に参加してもらい、自身の前年度作品を解説してもらった授業を

行った。それまでは作品が掲示された廊下を往復し、ワークシートを記入するという、作品を媒体とした間接的な異学年間交流だったが、実際にその作品を描いた本人が工夫した点や苦勞した点を語り、質問を受けるという直接的な異学年間交流は、身近な存在である上級生と交流することが、下級生にとって自分にもできるかもしれないという意欲や、真似をしてみたいという具体的な目標の設定の向上につながるよさが見られた。しかし緊張からなかなか活発なやり取りにはならず、学習内容の深化以前に、「自分の考えを言語としてまとめる」、「相手を目の前にして喋る」、「臨機応変に対応する」といった活動が困難な子どもの姿が明らかになった。

本来ならばそうした課題の克服のためには交流の環境を数多く作って経験を積ませることや、前段階におけるアイスブレイキング活動が有効であると考えられるが、実際の学校現場における物理的な制約からそれは困難である。その視点から、昨年度より次のような実践を行い、本年度も継続中である。

## 2. 交流授業について

### (1) 実践した異学年交流授業の概要（昨年度紀要より）

#### ① 計画に当たっての方向性

- ・同じ時間、同じ場所での交流活動は行わない。
- ・同じ時期に同時進行で活動を行う。
- ・直接的な交流活動は行わず、互いの間接的な交流活動によって相手学年の活動に関わる方策を考える。
- ・自己表現、他者理解といったコミュニケーション力の育成を図る活動にする。
- ・言語による表現（言葉）と非言語による表現（作品）を通した自己主張を行う。

#### ② 単元名 「Tシャツプリントのデザイン」

#### ③ 教材の概要

- ・実施学年は1年生と2年生とし、異学年間交流の活動とする。
- ・活動はそれぞれ同時期、同時進行、同じ教材で行うが、時間割の変更が必要になる共同活動は実施しない。
- ・制作活動の基本は白地のTシャツに何らかのデザインを施すものとする。デザインについては原画を制作し、完成した原画をスキャナーでパソコンに取り込んだあと、アイロンプリント用紙で出力して転写する。
- ・原画の制作については、A4サイズのイラストボードに水性絵の具（アクリルガッシュ）を中心に制作し、その他の描画用具（材料）や表現技法については生徒の発想を期待する。
- ・作品のテーマおよびその表現方法については、生徒の自由な発想に基づく。ただし既存のキャラクターを描いたり、写真をそのままコラージュ的に使用したりすることはしない。

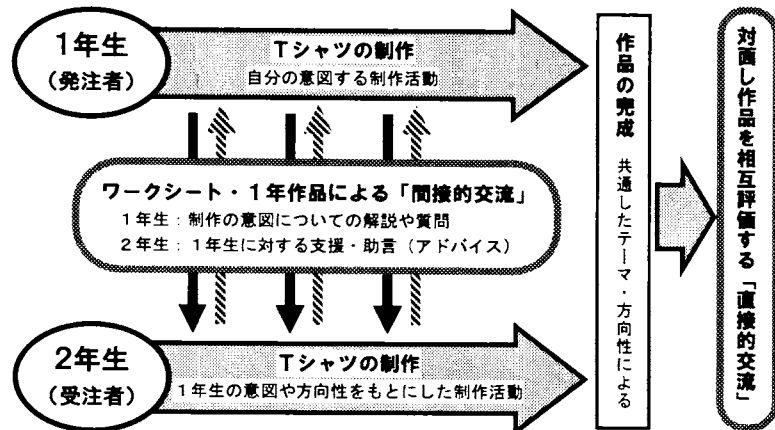
#### ④ 具体的な活動内容

- ・抽選くじで1、2年生各1名ずつの任意のペアを作り、交流を行う。その際、制作が終了するまでペアの相手については一切明かさないことにする。相手が誰であるかを知らないことで無用の感情移入を避けることができ、誠実な態度で交流ができると考えた。
- ・活動中の1年生の活動について2年生が支援、助言を行う形をとる。1年生から2年生への発信はワークシートの文章（言語的表現）と、制作中の作品（非言語的表現）により、2年生に対して自分の考えをまとめ、わかりやすく制作の意図を伝える努力をすることで、「自己主張」の力を育てる

ことができると考えた。2年生は1年生からの発信（解説や質問および実作品の制作経過）を受け、それに対してワークシートの文章（言語的表現）による返信を行う。その際に1年生の考えや制作の意図を否定、非難するのではなく、そのよさを汲み取り、さらによりよいものにするための支援の意識を持つ努力をすることで、「他者理解」の力が育つと考えると考えた。

・1年生の制作活動についてはあくまでも1年生自身が主体で、2年生の支援・助言にどの程度共感し参考にするかの決定は1年生が行う。それに対し2年生の活動は1年生の意図や方向性をもとに展開するものとし、発注者としての1年生に対し、受注者（デザイナー）としての立場で制作にあたる。このことで、より相手の考えを理解しようとする姿勢が強化され、積極的な情報収集を求められることになると思った。

・制作が進み、1,2年生の双方の作品が完成したところで、初めて同じ時間、同じ場所での交流授業を行い、対面の場「直接的交流」を作ることにする。事前に「間接的交流」を行ってきていることで、初対面の場合よりもスムーズな交流活動が展開されると考えた。



異学年間交流授業の流れ (2007, 西澤)

## (2) 異学年交流授業に関するアンケート

授業における活動の様子について、より具体的な考察を行うため制作活動の終了後にアンケートを実施した。アンケートの内容については、その前半では他者と自己の関係をどのようにとらえているかについて調査し、後半では授業で行った活動の感想について調査した。なお前半部については、戸田弘二氏によって開発された「内的作業モデル尺度」(1988)<sup>1</sup>を参考にした。

### ① 回答数

1年生156人, 2年生156人

### ② 内容について

【選択肢】 4.非常に当てはまる 3.やや当てはまる 2.あまり当てはまらない 1.まったく当てはまらない  
友だちとの関わりについて自分自身をどのようにとらえているか

1. 私は知り合いができやすいほうだ。
2. 私はすぐに人と親しくなるほうだ。
3. 私は人に好かれやすい性格だと思う。
4. たいていの人は私のことを好いてくれていると思う。
5. 気軽に頼ったり頼られたりすることができる。
6. 初めて会った人とでもうまくやっけていける自信がある。
7. 友だちは本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。
8. ときどき友だちが、本当は私を好いてくれているのではないかと、わたしと一緒にいたくないのではと心配になることがある。
9. 自分を信用できないことがよくある。

<sup>1</sup> 堀洋道監修・吉田富二雄編『心理測定尺度集Ⅱ』(2001年, サイエンス社), P109~114.

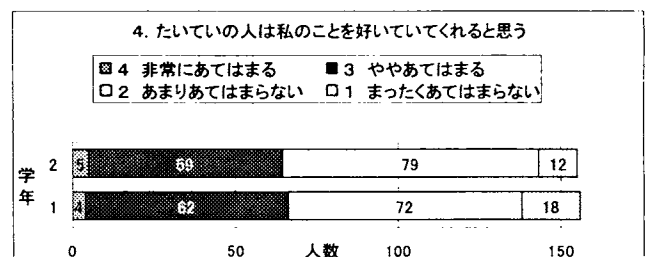
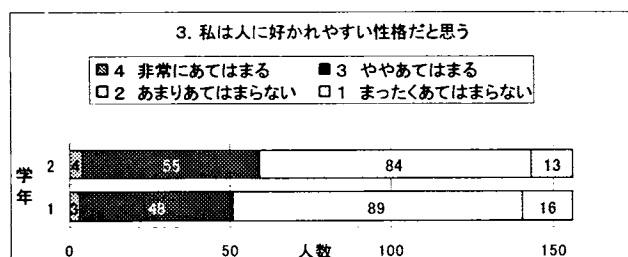
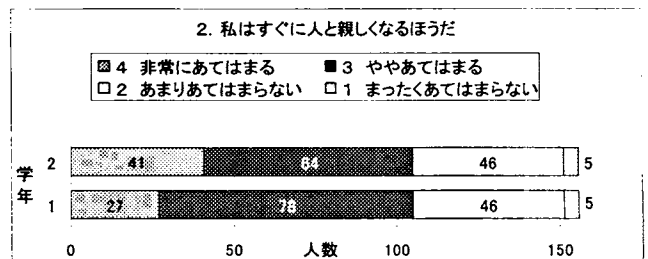
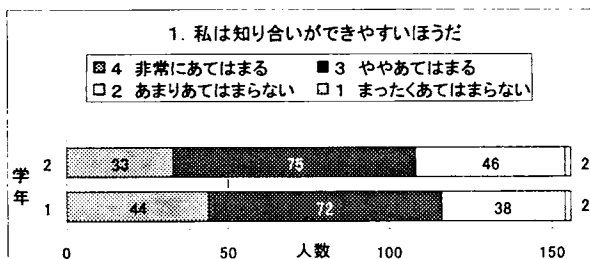
10. あまり自分に自信が持てないほうだ。
11. 私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から嫌がられていると感じることがある。
12. ちょっとしたことでも、すぐに自信をなくしてしまう。
13. 人に頼るのは好きではない。
14. 私は人に頼らなくても、自分一人で十分にうまくやっていけると思う。
15. あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう。
16. あまり人と親しくなるのは好きではない。
17. 人は全面的には信用できないと思う。
18. どんなに親しい関係であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう。

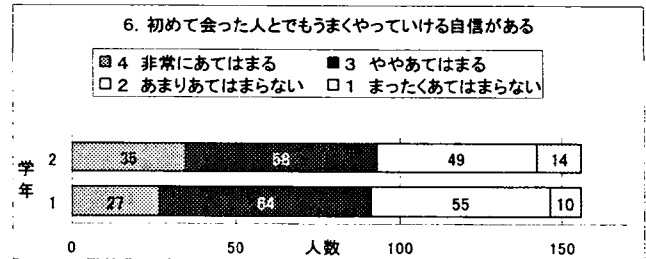
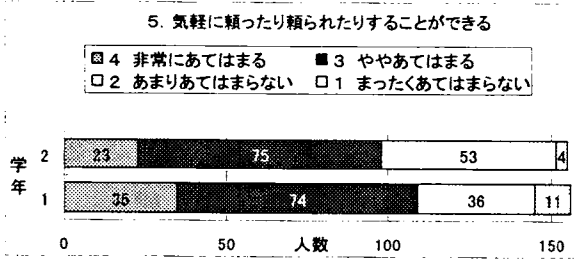
この活動中に感じたこと

1. 今回の授業で1年生（2年生）とやりとりをしたことが楽しかった。
2. 1年生にアドバイスすることは、自分の制作の役に立ったと思う。
3. 直接顔を合わせて会話をするよりも、ワークシートを使った文章でやりとりするほうが自分の意見を言いやすかった。
4. 直接顔を合わせてやりとりをするよりも、相手の言っていることを素直に受け止めることができた。
5. アドバイスをした1年生に、直接会ってみたいと思うことがあった。
6. 1年生が書くコメントを読んで、その書き方や言葉で不愉快な気持ちになったことがある。
7. 文章によるやりとりでは相手の考えや言っていることがわかりにくかったように思う。
8. 美術のように自分で考えて表現する活動の時には、他の人からのアドバイスは必要ないと思う。
9. 機会があれば、知らない相手とまたこうした取り組みをしてみたいと思う。

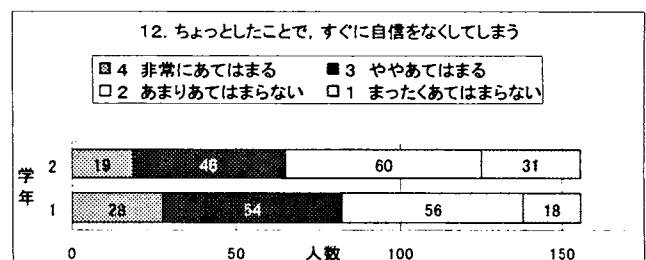
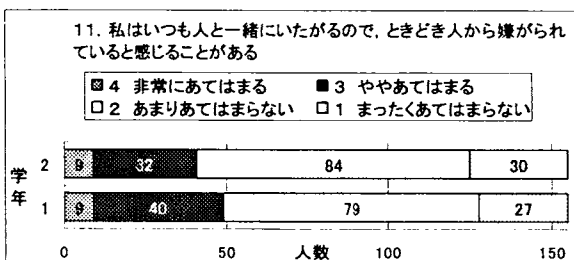
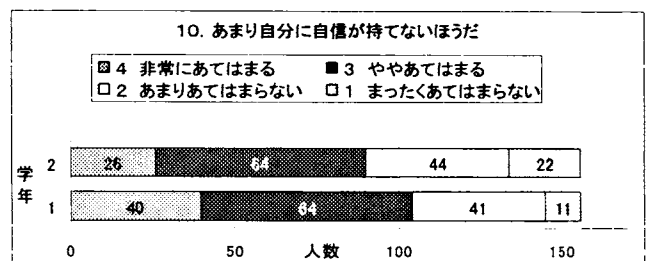
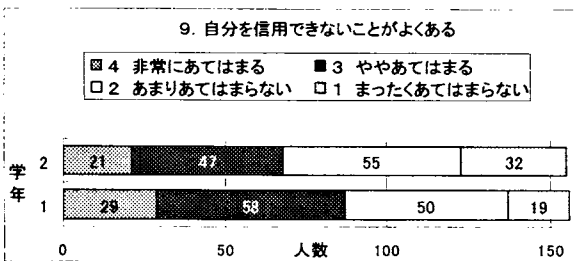
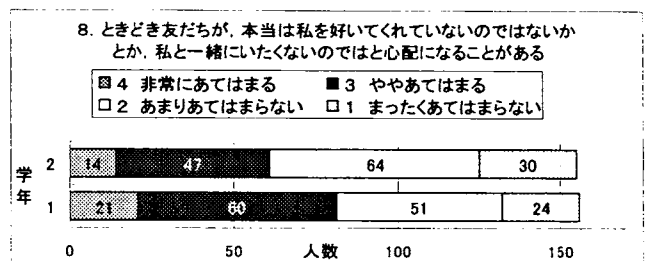
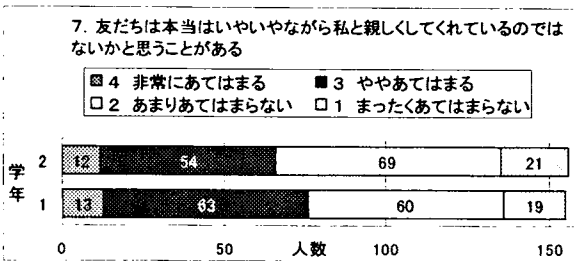
③ 他者と自己の関係について

項目1から6までは、他者は応答的で自己は援助される価値のある存在という表象を持つ、安定型の尺度である。1,2年生共に、「知り合いができてやすい」（項目1）,「すぐに人と親しくなれる」（同2）,「頼ったり頼られたりする」（同5）,「初めて会った人ともうまくやれる」（同6）の回答で「あてはまる」「ややあてはまる」が過半数を超えているのに対し、「人に好かれやすい」（同3）,「人は私を好いてくれている」（同4）の回答が過半数を割っていることが興味深い。これまでにも仲の良い友人関係があったこと、現在仲の良い友人がいることからくる自信に対し、人から好かれているという思いは低く、自分に対する自信は少ないのではないだろうか。

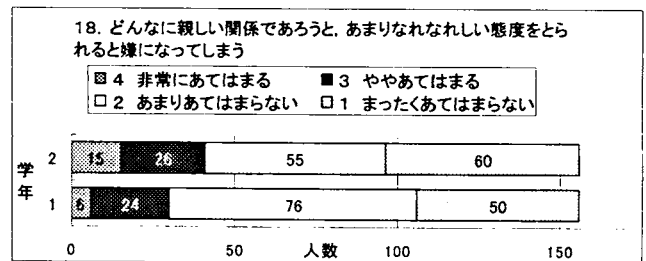
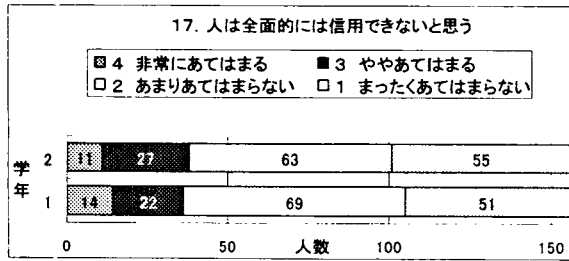
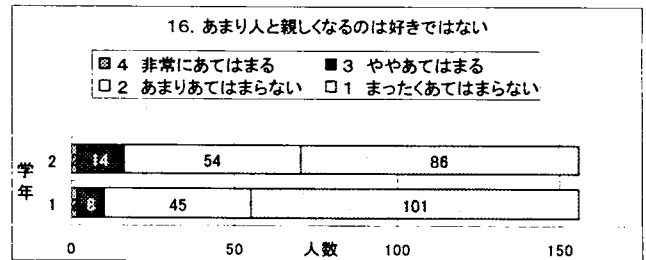
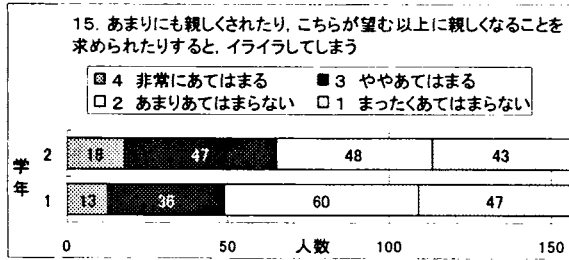
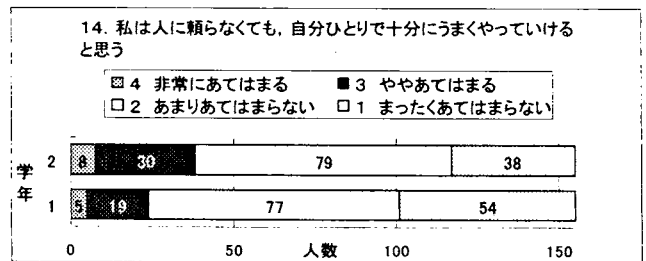
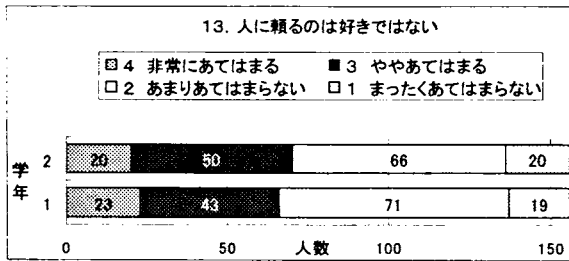




続く項目7から12までは、他者に対して信頼と不信の二律背反な表象を持つアンビバレント型の尺度である。友人から嫌がられたり、いやいや親しい関係を持たれたりしているとは思わないが、「自分に自信が持てない」(項目10)で「あてはまる」と回答した子どもが過半数を超えており、安定型尺度で見られた自分に対する自信のなさがここでも明らかである。その傾向が1年生でやや高いのは、中学校という新しい環境になって日が浅いことで、友人関係を作る経験がまだ少ないことや、自分の能力を発揮するような場面が少ないことに、その理由を見出すことができるのではないかと考える。



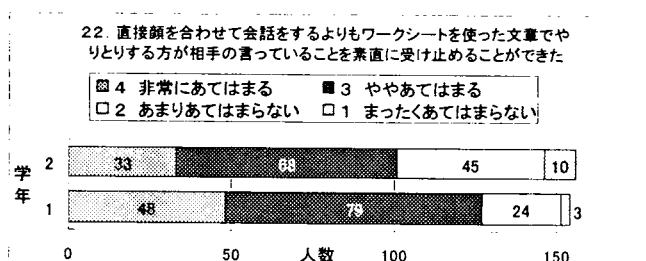
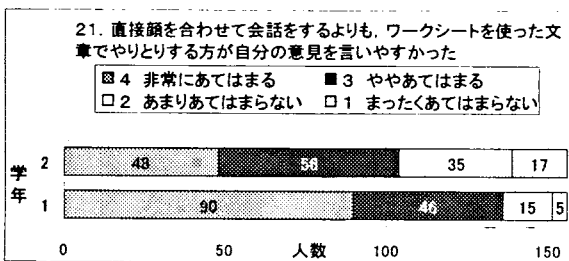
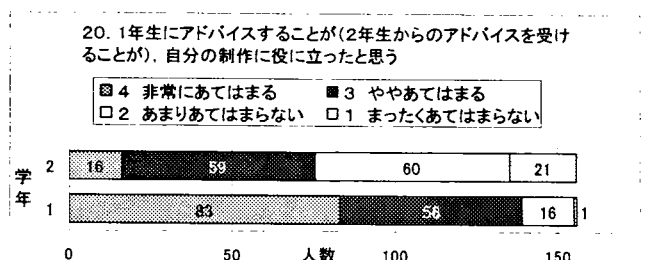
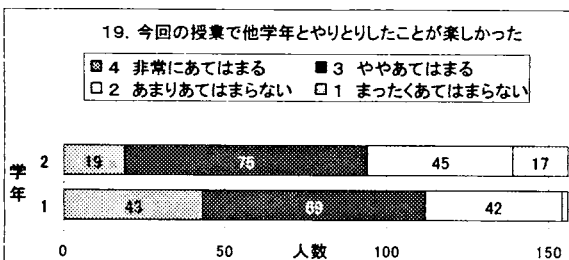
項目13から18までは、他者は拒否的で援助が期待できないという考え方から、それを補完するためにきわめて自己充足的であるという回避型である。「人に頼らず一人でやっつけていける」(同14)、「親しくするのは好きではない」(同16)に「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答した子どもが非常に少ないことから、安定型やアンビバレント型同様、自分に自信がない様子や、その支えとしての親しい友人関係を持ちたいという気持ちが伺える。しかしその友人との関係については、「人に頼るのは好きではない」(項目13)で「あてはまる」と回答した子どもが、項目14、16に比べて多いことから、必ずしも深いところまで深く立ち入った関係を求めているわけではなく、むしろ「つながっている」ことの安心感、その状況自体を必要としているのではないかと考えられる。



このように、自分に自信が持てず、他者との親しい“関係”を求めながらも、その関係にはある程度の距離感を持っていたいという子どもたちに対し、今回の授業の「同じ時間、同じ場所での直接的な交流活動は行わず、ワークシートの間接的な交流活動によって相手の活動に関わる」という方向性は妥当であると考えられる。実際に活動を行った子どもたちの感想は以下のようなものになった。

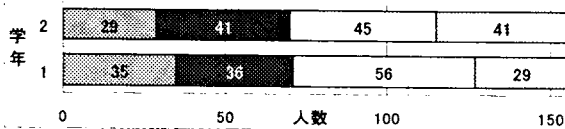
#### ④ 授業で行った活動についての感想

他学年とのやりとりの活動が楽しかったという感想が多く（項目19）、機会があればまた行ってみたい（同27）という子どもたちもほぼ同じ傾向であった。目新しさもあったと思うが、逆に携帯電話やインターネットなどで言語によるコミュニケーションを日常的に行っている子どもたちは、今回の授業の活動に対して、比較的抵抗感なく取り組めたと考えられる。そうしたことを裏付けるように、直接顔を



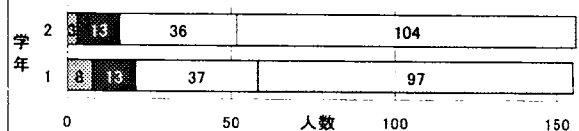
23. アドバイスした(アドバイスを受けた)相手に、直接会ってみたいと思うことがあった

4 非常にあてはまる     3 ややあてはまる  
 2 あまりあてはまらない     1 まったくあてはまらない



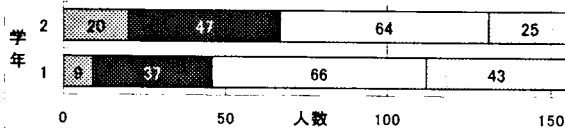
24. 活動中、相手が書くコメントの書き方や言葉で不愉快な気持ちになったことがある

4 非常にあてはまる     3 ややあてはまる  
 2 あまりあてはまらない     1 まったくあてはまらない



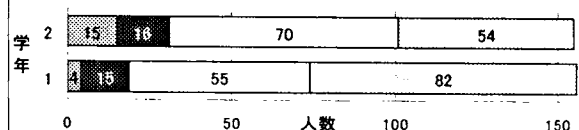
25. 文章によるやりとりでは相手の考えや言っていることがわかりにくかったように思う

4 非常にあてはまる     3 ややあてはまる  
 2 あまりあてはまらない     1 まったくあてはまらない



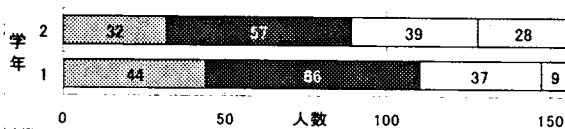
26. 美術のように自分で考えて表現する活動の時には、他の人からのアドバイスは必要ないと思う

4 非常にあてはまる     3 ややあてはまる  
 2 あまりあてはまらない     1 まったくあてはまらない



27. 機会があれば、知らない相手とまたこうした取り組みをしてみたいと思う

4 非常にあてはまる     3 ややあてはまる  
 2 あまりあてはまらない     1 まったくあてはまらない



合わせるよりも文章の方が意見を言いやすく(同21)、意見を受け止めやすい(同22)という感想が多かった。しかし、文章によるやりとりそのものは楽しく、抵抗感がないとしながらも、その文章がわかりやすかったかという問い(同25)については、「あてはまる」と答えた子どもがやや少なくなっている。

これは相手にわかりやすい言葉で伝えるという言語の能力でもあり、新学習指導要領にも関わる今後の大きな課題だと考えられる。制作そのものについての効果は、学年によって大きく異なるものとなった(項目20)。すなわち、アドバイスを受ける側の1年生では、自分の制作に役立ったと答えた子どもが約9割だったのに対し、アドバイスをする側の2年生では5割弱にとどまっている。当所は、アドバイスをするためのさまざまな思考活動が2年生自身の制作にも生きるのではないかと考えたのだが、本人たちにはそうした実感があまりなかったようで、やや残念な結果になった。それでも美術の表現活動において他の人からのアドバイスは必要だと考える子どもも多く(同26)、今後の研究と継続については大きな可能性があるように思う。

### 3. 成果や課題

昔のような異年齢の集団で遊ぶ機会が少なくなる一方、集団活動は同学年で行われる機会が増えたことで、年長者がその発達段階における自身の能力を上位者として発揮する機会が減り、一つの規準で個々の能力の差を比較する(比較される)機会が増えている。当然自身に対する自信を持つことは困難になり、同年齢集団の中でおちこぼれていない状態、つながりを求める傾向が強くなっている。

今回の異学年交流授業の実践で明らかになったのは、具体的に特定できない相手に対して、子どもたちが予想以上に誠実な態度で向き合おうとしている点である。直接的な交流活動における力が弱くなっている姿の裏側で、間接的な交流を活用できる力は身につけてきているのかもしれない。そうした現状を十分に理解したうえで、それを活用するシステムの構築や、今持っている個々の能力を自信を持って発揮できるような状況をコーディネートする授業や学校活動を行っていく必要を強く感じているところである。